見習い

朝の新鮮な空気を吸うと、眠気も消えて行く。リタが治療師の見習いを始めてから一ヶ月が経ち、生活はすっかり変ってしまったが、朝の水汲みだけは変らない。

お父さんは、もう治療師見習いなのだから家の仕事はしなくてもいいと言ったが、水汲みは朝食前の仕事だし、朝食までは家で過ごすのだから、水汲みを止める理由はないとリタは思う。

それよりも、水汲みを始めた時は、これからすこしずつ家の手伝いを増やしていって、最後にはお母さんの仕事を全部出来るようになるつもりだったのに、一度自分の仕事にしたものをまたお母さんに返すのは無責任のような気がしたからだ。

それに水汲みには楽しみがある。朝一番に、誰も来ていない森の泉で冷たい水の最初の一口を飲むのはリタの特権だ。夜の間泉の周りで踊っていた妖精たちの気配がまだ残っているように思える。

水を汲んで来た後は、お母さんが朝食の支度をするのを手伝う。これは前からやっていたこと

だけれど、今では熱心さが違う。リタは治療師の食事を作らなければならないので、お母さんにいろいろ質問したりしながら、料理の勉強をするのだ。

治療師も料理を教えてくれるけれど、あまり熱心ではない。それに治療師は味にこだわらないので、味つけはお母さんに習うしかない。

食事の支度が出来るとお父さんを起すか、鍛冶小屋から呼んで来て朝食になる。リタが治療師見習いになってからというもの、お父さんは、すぐに火の粉がかかって火脹れが出来たからちょっと見てくれなどと言うが、その腕はもう火脹れや火傷の跡だらけで、ちょっとだけ赤くなっている新しい火脹れを探すのも大変だ。それでも小さな赤い点を見つけて、薬をちょこんと塗ると、お父さんは大喜びする。大した傷でもないのにどうしても薬を塗ってほしいという馬鹿な患者にはこれでも塗っておくといい、少なくとも害にはならないと治療師が言っていた薬なのだけれど。

リタはお父さんを馬鹿だとは思わないけれど、お母さんが言うにはあれは親馬鹿よということだ。愛情が多すぎてつい馬鹿なことをするけれ

ど無害だから放っておけばいいという。
朝食のあと、リタは治療師の家に行く。

「よし、今日は病人も出ていないようだし、森に薬草を取りに行こうか」
治療師がそう言って、お弁当の用意をするようにと指示したので、リタはパンとチーズを籠に入れた。
「ワインも忘れないでおくれ。それからもちろん、薬草を入れる袋もね」
「なんだかピクニックみたいね」
「あとで一人で行ってもらうから、道を覚えておくんだよ。森の奥まで入るからね」
「はい」
「治療師の仕事は薬草採りから始まるんだからね。しっかり覚えるんだよ。必要な薬草が近くで採れない時は、街の治療師組合から買うことも出来るけれど、それだと高くつくからね」
リタと治療師は一緒に西の森に出かけた。
「いいかい、薬草の生えている場所は秘密だからね。治療師組合以外の者には話してはいけないよ。治療師はこれで生活しているんだからね。たとえ、マルカやガルムにでも話してはいけな

いよ」
「はい、わかりました」
他に漏らしてはいけない秘密を教えられるということは、リタが治療師組合の一員として認められたということを意味している。リタはそのことが嬉しかった。
「なにもケチな了見で言っている訳じゃないんだよ。薬草は使い方によっては毒にもなるからね。それに薬草の見分け方は結構難しいからね。組合員以外に勝手に採られるとまずいことになるかも知れない。わかるね」
そう言って返事も聞かずに治療師は歩いて行く。森の中にも細い道は通っている。その道だって下草が伸び、上には枝が張り出してどこが道だかすぐにわからなくなる。しかし治療師はその道すらしばしばそれて薮の中に足を踏み入れて行く。
治療師の服は丈夫だけれど、手足はすぐに茨の棘やらで引っかき傷が出来る。こんな木こりや猟師のような仕事までしなければならないとはリタは思っていなかった。
「ちゃんと道は覚えているかい」
治療師はそう聞くが、そもそも道でないとこ

ろを歩いているのでは覚えようがない。その上、治療師も時々間違えて引き返す。
「なにしろあたしもまだこの村には来たばかりだからね」
「それじゃあ、どうして、どこに薬草が生えているのかわかるの」
「ああ、それはね、この薬草は日当たりのよいところに生えるとか、この薬草はきれいな水の流れているところに生えるとかそういう習性があるからだよ。もっともそういう条件のところなら必ず生えているという訳ではないんだけれどね」
「じゃあ、この村に来てすぐは大変だったのね。毎日、薬草の生えている場所を捜し回ったの？」
「来てすぐのときは、街から持ってきた薬草があったからね。今だってまだ少しは残っているよ。でも、そろそろこの辺の薬草も知っておかないとね。ついでにお前にも薬草の探し方を教えないといけないしね。ある意味、お前は運がいいよ。街で治療師の見習いになるとなかなか薬草の探し方までは教えてもらえないからね」
茨の棘に刺されて傷だらけになって森の中をさ迷い歩くことが、運がいいとはリタには思えな

かった。
「あったあった。これだ」
そこはぽっかりと開いた空き地で、薄暗い森の中でそこだけ明るい日差しが射していた。そこに薄紫の花を付けた膝くらいの丈の草が群れをなして生えていた。
「あら、この花ならカラタ姉さんの家の近くにも生えていたわよ」
「そうかい。似ている草じゃないのかね。まあ、そうだとしても、人の家のそばで薬草を採る訳にはいかないよ。秘密が守れないからね」
似ているけれど違う草だといわれるとリタにははっきりしたことは言えなかった。花の様子はそっくりだけれど、治療師は葉の形や付き方まで細かく説明した。この草はカタリスという名で、化膿止めになるという。
治療師は生えている草の中から五本だけ引き抜いて、根元を均して跡を消した。
「全部採ったらいけないよ。そんなことをしたら、次に探す時にまた別の場所を見つけなければならないからね。それに誰かこの場所を知っている人がいたら、草がなくなっているのを怪しむかも知れない。少しだけ採ったなら、また

増えるからね。人が見てもわからないし」
　そんなに秘密にこだわらなくてもこの村には自分で薬草を採って治療師に支払うお代を浮かそうなんて人はいないだろうとリタは思う。治療師にそういうと、この村だけの問題ではない、治療師が薬草を採る時の心得というものだという答えが返ってきた。
　二人はまた道に戻って、そこから今度は森の中でも一番奥の暗いところに向かった。少し小高い丘になっているところの北側にちょっとした崖があり、その崖の下に水が染み出してじめじめしたところである。
　そこで治療師は苔を取った。
「ここじゃ暗くてよく見えないから、家に帰ってから説明するけれど、苔にもいくつか種類があるんだよ。これはセンダナという苔で、悪いものを食って腹が痛くなった時に効く下痢止めになる」
　リタは苔に種類があるなどとは考えたこともなかった。苔は苔だと思っていたのだ。でも、草だって、木だって何種類もあるのだから、苔に種類があっても不思議はない。
　それから丘を登ったから、そこに別の薬草が生

えているのかと思ったら、お昼にしようということだった。水筒を持って来ていなかったので、リタは水を汲みに行きたかったが、また丘を下って崖下まで戻って水を汲むのは面倒だと思っていると、治療師がどうしたんだい、お前もワインを飲めばいいじゃないかというので、リタもワインを飲んで、二人でパンとチーズを食べた。

お母さんが許さなかったので、これまでリタはワインを飲んだことがなかった。でもリタはお母さんやお父さんがおいしそうにワインを飲むので、一度飲んでみたいと思っていたのだ。治療師が勧めているのだから、もちろん飲んでいいはずだった。

初めて飲むワインは、予想していたほどおいしくはなかった。それでリタはチーズをひと欠け口に入れてから、もう一口飲んだ。つまみが大切だということを思い出したのだ。今度はさっきよりもおいしかった。

だんだんおいしくなるのかも知れないと思い、もう一口飲んだ。確かに一口ごとにおいしくなって行くようだ。それより、体がぽかぽかと暖かくなって来て、なんだか愉快な気分になってきた。

そうか、これが酔っぱらうってことなんだわと

リタは思った。
「なんだか、あたし酔っぱらっちゃったみたい」
「そうかい。あんまり強くないんだね」
「あたしねぇ、はじめてワインを飲んだの。でも、前から飲んでみたいなぁとは思っていたのよ。でも、母さんが許してくれなかったので飲んだことがなかったの。だから、今日はじめてワインを飲んだのよ」
「リタ、お前酔ってるね」
「そうなの。あたし酔っぱらってるの。前からあたし酔っぱらうってどういうことなのかって不思議に思っていたの。だけど、こういうことだったのね。酔っぱらうって、楽しいわね。このパンもおいしいわ」
治療師はやれやれと思ったが、自分が勧めた以上は仕方がないかとも思った。ともかく、今日はもうこれ以上の薬草採取は無理だろう。でも、治療師見習いの経験として、一度くらい思いきり酔うのもいいかも知れない。
「楽しいのは結構なことだね。もう一口いくかね」
「うん、おいしいわね。最初はあんまりおいしくないと思ったのだけれど、だんだんおいしくなってくるの。もうなんだかすごくおいしいわ。

それでね、あたし、治療師の見習いになれてすごく嬉しいの。でも、この服が臭いのはちょっと嫌ね。それさえなかったら、もっとずっと治療師が好きになれるのに」
「それはもう説明しただろう」
「そうなの。この服は薬草の汁に浸けてあるから変な匂いがするのよね。それで病気から治療師を守ってくれるの。それに黒い色になるから、血が付いても目立たないのよね。治療師の服はすぐ血の跡がつくから、黒くなかったら患者が驚いて逃げ出すかも知れないのよね」
「そうそう、よく分かってるじゃないか」
「でもいい匂いがして病気にならない薬草ってないものかしらね」
「ないんだから仕方がないじゃないか」
「あってもいいと思うわ」
「ああそうかい。じゃあ、お前が見つけるといいよ」
「うん、あたしきっと見つけるわ。おしっこしてくる」
リタはそう言って立ち上がろうとしたら、とたんにくらくらして倒れそうになった。
「そうだわ。これが酔っ払いっていうものだわ」

リタはふらふらしながら、木の陰に隠れて用を足した。
治療師はリタが酔いながらも、酔うという状態を観察していることに気づいていた。まったく、あきれた娘だねと治療師は思った。
「おまえ、ちょっとこの辺に座って休むんだね。そんなにふらふらしたまま森の中を歩いたら危ないじゃないか」
リタが戻ってくると治療師はそう言って、リタを木の幹を背にして地上の張り出した根の上に座らせた。
「あたしね、最初はカラタ姉さんみたいにお話をするひとになりたかったの。でも、今は治療師の見習いになってよかったと思うわ。これがあたしの運命だと思うの」
「ああ、そうかい」
「そうなの、だから左眼を怪我しこともそう悪いことじゃないかも知れないと思うの」
「あたしにゃ、わからないね」
やがてリタは木の幹に寄りかかって眠ってしまった。
治療師は残ったワインを少しずつ飲みながら、リタの寝顔を見て、あたしの見習い時代はこん

な風じゃなかったと思った。

「さ、もう帰らないと日が暮れちまうよ」

治療師に起されると、リタは酔いが醒めていることに気づいた。けれども頭が痛い。

「これが宿酔ってものかしら」

「あたしの経験から言わせてもらえば、宿酔はそんなもんじゃあ済まないね。さ、帰るよ。薬草採りはまた今度だね」

「ごめんなさい。こんなに酔っぱらうとは思わなかったわ」

「まあいい経験だろうさ」

二人は森の中を急いで戻り、日が暮れる前に治療師の家に帰り着いた。リタの頭痛は歩いているうちにおさまって来た。

治療師の家に帰り着いて、これから夕食の支度をしなければとリタが思っていると、サラが茹でたソーセージを持ってやって来た。

「これ、母さんが持って行けって。今日豚飼いのところからソーセージを大量に買ったから」

リタが見習いに来る前は治療師の食事は余裕のある家が交代で作って持って来ていたのだ。リタが見習いになってからは出来上がった料理で

はなく、野菜や肉などの材料を貰うことが多くなったが、今でも出来上がった料理を持ってくる者もある。
「助かったわ。さっきまで出かけていて今日の夕食は何にも用意してなかったの」
「本当はね、あたしが母さんにお願いして、来させてもらったの。だって、リタが治療師の見習いになってから全然話す時間がないんだもの」
「おや、ソーセージかい。いいねえ、ソーセージにはビールが合うんだが、ビールはないかい？」
「治療師はお酒が好きだっていうから、持ってきたわ」
「おお、なんて気が利く娘だろうね。リタ、お前も飲むかい？」
リタは大げさな身振りで否定した。
「ねえ、治療師さん。ちょっとリタとお話してもいいかしら。あたしたち親友なのよ」
治療師はサラの持ってきた小さな樽から、カップにビールを注いで飲みはじめていた。
「ああ、いいともあたしは一人で飲んでいるから勝手に二人で話をするといいさ」
「サラはもう食べて来たの？」
「実はまだなの」

「じゃあ、一緒に食べましょ。いいでしょ、治療師」
「あたしの分を残しておいてくれればね」
そこでしばらくの間、治療師はビールを飲み、リタとサラはソーセージとパンの食事をした。
「あたしもうリタにお話の続きをしたくて我慢が出来なかったのよ」
サラはさっさと食事を済ませると、お茶をいれながらそう言った。
「あの義賊の話ね。ごめんなさい、あたしすっかり忘れていたわ」
「そうよ、カラタ姉さんの家にも来ないし、我慢出来ないから、あたしの方から出向くことにしたのよ」
「ありがとう。さあ、話してちょうだい」

警備隊長のローランドと義賊のサラマンダが屋根の上で対決したところまで話したのよね。ローランドはその晩から熱を出して寝込んでしまうの。お医者様にかかるのだけれど、どこにも悪いところは見つからないの。
ところで、ローランドの妹のローズマリーは二人の戦いを窓から見ていたのよ。そしてローラ

ンドの病気は恋の病に違いないと思うの。ローズマリーにはサラマンダが女だってことがわかったのね。ローズマリーは前から勘のいい女の子だったのよ。

そしてローズマリーの考えた通りなの。ローランドはサラマンダが女だとは気がついていないのよ。けれど、ローランドはサラマンダの姿が忘れられなくなってしまったの。初めはその異国風の変った剣さばきが気になるのだと思っていたのね。剣士としてそれは当然のことだと。でも頭に浮かぶのは一瞬だけ見えた頬の形とか、マスクの影から覗いていた眼の輝きばかりなのよ。

そしてローランドもついにそれが恋だと気付くの。そして男に恋してしまったと思って悩むのよ。それで熱が出てしまったのね。

でもさしものローズマリーもそこまでは気がつかなかったのよ。ローランドがふつうにサラマンダに恋していると思ったのね。それでこう言うのよ。

「お兄様、あの義賊の人もきっと悪い人ではないのだわ。だって、本当に悪い人だったら、盗んだお金も全部自分のために使うはずだもの。きっと、盗みが悪いことだって気がつかないだけな

んだわ。だから、お兄様が捕まえて、そのことを教えてあげたら、きっとわかってくれると思うわ」

それを聞いてローランドの心の中に浮かんだのは、捕まえればあの人にもう一度会えるという気持ちだったと思うわ。とにかくローランドはその言葉で警備隊長として務めとあの人に会いたいという気持ちが矛盾しないということに気付いたのよ。

そうするとローランドの熱は一遍で引いてしまうの。そして職場に戻って、義賊を捕まえるための策を練りはじめるのよ。

ところでスリのシーノを覚えているかしら。義賊を捕まえるための囮として処刑されるところだった少年よ。あの少年は義賊に入るの。だって、もう顔もみんなに知られているし、義賊だってことになっているからこの街には住んでいられないのよ。

でもよその街に行っても、頼る人もいないのだからやっぱりスリでもするより仕方がないわ。それよりも義賊の仲間になって、その隠れ家に一緒に住んだ方が安全だろうってサラマンダも考えたのね。それにシーノも仲間にしてくれって

頼んだのよ。
　それでシーノは義賊の訓練を受けるのよ。拳闘士の訓練ね。拳闘士の中にはサラマンダみたいに本気で戦う人たちもいるのだけれど、中には見世物として軽業なんかを取り入れた滑稽な戦いをして観客を笑わせる人もいるの。
　覚えているかしら、屋根の上でシーノの身代わりをした少女もそういう軽業をする人なのよ。彼女の名前はフィーラっていうの。シーノはフィーラから軽業を習うのよ。それと短剣の使い方もね。その代わりにシーノはフィーラにスリのやり方を教えるのよ。二人とも若いから上達が早いの。
　二人は最初けんかばかりしているのよ。でもやがては恋に落ちるのだと思うわ。だって、その方が素敵でしょ。

「それにしても、お茶だけじゃ寂しいわね。かといってソーセージとお茶では全然合わないし」
「ソーセージとビールは最高によく合うんだがね」
「じゃあ、あたしもビールをもらっていいかしら」
「もう、サラったら」

「あんたが持ってきたんだから、好きなだけ飲めばいいさ。あたしの分さえ残しておいてくれたらいい」
「じゃあ、いただくわね。リタも飲んだら」
「あたしはいいわ」
「この娘は昼にワインを飲んでさんざん酔っぱらったんだよ」
「それは言わないで」

ある晩、義賊の一味はお金持ちの大臣の屋敷に忍びこむの。大臣が賄賂をもらって蓄えた宝石や金貨を大量に盗み出して、無事に屋敷から抜けだすのよ。けれども屋敷の塀から外に出たその時、呼子の音が響き渡るの。
警備隊が大臣の屋敷を見張っていたのよ。ローランドは次に狙われそうなお金持ちの家の中から、一番悪どいやり方でお金を儲けている大臣が狙われると思って罠を仕掛けたのよ。
大勢の警備隊が、義賊の一味を取り囲んだの。そしてローランドがその包囲の中に進み出るのよ。
「さあ、首領は前に進み出ろ」
それでサラマンダが一味の中から前に進み出

てこう言うのよ。
「なんだ尻餅をついた剣士じゃないか。一人では勝てないから大勢で来たな」
もちろんサラマンドラはわざと低い声を出して女だとわからないようにしているのよ。それを聞いたローランドは、もう本当に怒ってしまうのよ。やはり、心の中で好きだと思っている人にからかわれたせいなのよ。
「ようし、それなら一対一で勝負してやる」
ローランドは部下に手出ししないように指示しておいて、サラマンダと決闘を始めるのよ。ローランドとサラマンダは剣の流儀は違うけれど、実力はそんなに違わないのよ。でも、やはり男の分だけ体力でローランドが勝っているの。
ローランドの振り下ろす剣をサラマンダが受け流し、シュッ、シュッという音が響き渡るの。時にはローランドの力が勝って、サラマンダの脚に切り傷を付け、時にはサラマンダの剣がローランドの隙をついて肩に切り傷をつけるの。
そんな戦いがしばらく続くと、ローランドはふと香水の匂いがしてくるのに気付くのよ。その匂いはサラマンダからしてくるの。そうするとローランドはサラマンダが女ではないかと思い

はじめるのよ。
もちろんローランドは立派な騎士だから、女性とは戦わないという信念を持っているの。だから、ローランドはだんだん剣を振る腕に迷いが生じてくるのよ。そしてサラマンダに押されるようになるの。
そしてついにサラマンダの剣がローランドの剣を弾き飛ばすのよ。そして、サラマンダはローランドの喉元に剣を突きつけるの。
「さあ、どうする」
サラマンダはそう言うのだけれど、でも義賊の一味が警備隊に取り囲まれている状況に変わりはないのよ。
「殺せ。だが、お前たちは逃げられないぞ」
ローランドはそう言うのだけれど、警備兵たちは動揺しているのよ。だって、ローランドは警備兵のみんなかから慕われている隊長さんなんだもの。
その時、爆発音がしたかと思うの目の眩む光が辺りを包むの。そらから、今度はすごい煙幕が現れて何も見えなくなってしまうの。さらに、警備兵たちは急に眠くなってしまうのよ。
「よお、色ぼけさん」

サラマンダはそう言って、香水の瓶をローランドにぶつけて去って行くのよ。それでローランドはサラマンダがわざと香水の匂いをさせていたことを知るの。その香水は大臣が奥方のために買ったとっても高価な香水なのよ。

実は、シーノとフィーラの二人が閃光と煙幕と眠り薬の仕掛け人なの。二人は義賊の別働隊だったのよ。二人は屋根の上から火薬を投げたの。だけど警備兵の包囲が厳しかったから、ずっと遠くで屋根に登ってこっそり近寄らなければならなかったのよ。サラマンダは二人が来ることを知っていたから、時間稼ぎをしていたのね。

こうして、ローランドはまたも義賊に逃げられることになるの。でも、ローランドはちょっぴり安心していたのよ。だって、義賊を包囲した時に彼は気付いたのよ。義賊たちは捕まったら死刑だってことに。

でもローランドも失敗ばかりしているわけじゃないわ。実は、この次にサラマンダが盗みに入った時は、ローランドに捕まってしまうのよ。

「でも、その話はまた今度ね」

「あら、そこで終わりなの。なんだか意地悪ね」

「カラタ姉さんから習ったのよ。次に気を持たせて終りにしなさいって」
「はっはっはっ。なかなか面白いじゃないか。秘密の技法というやつだな。組合でも作るかね」
「組合にはならないわ。だって、お話にお金を払う人なんていないもの」
「街にはいるさ」
「とにかくそんな面倒なことには係りたくないわ」
「まあいい、もう遅いから送って行こうかね。リタも一緒に帰りなさい」
リタは治療師に送ってもらうのはなんだか悪い気がしたし、最後には酔っている治療師が一人で家に帰ることになるので心配だった。けれども治療師はたいして酔っていないと言い、更に、治療師を襲うような不届き者はいないし、いても対処できると言った。そこでリタとサラは治療師に送ってもらってそれぞれの家に帰った。

次の日のリタの見習いとしての仕事は洗濯だった。リタは洗濯が嫌いではない。特に春や夏の洗濯は好きだった。汗を吸い汚れて臭くなった洗濯物が、きれいになるのは気持ちがいい。

けれど、治療師の洗濯はそうではない。一度洗濯してきれいになるのは確かなのだけれど、その後、臭い液につけて汚く臭くしているように思えるのだ。

臭い液は治療師の家の薬品庫の隅に置いてあって、病人に与えるために煎じた後の薬草がみんな放り込まれている。料理に使った野菜の残りくずを全部放り込んだ豚の餌のようなものである。臭いのは当然であった。

リタは本当に病気避けに必要な薬草だけを入れたら、こんなにひどい匂いはしないと思うのだが、じゃあ、必要でない薬草は煎じたあとは捨てるだけなのかというと、それはもったいないような気がする。それにどの薬草が病気避けに必要なのかというのははっきりしない。実はこの悪臭こそが病気避けになっているのかもしれないのだ。とにかく、リタは見習いであり、文句を言える立場ではなかった。

少なくとも臭い液に浸すまではふつうの洗濯と変わりはない。リタは川の洗い場に服や包帯を持って行って洗った。どうしても黒い色の水が流れでるので、洗い場の一番下流で洗う。

それから洗い場のそばの灰置き場から、みんな

が共同で使っている洗濯用の灰を取って来てそれを布にまぶして、手で押したりもんだりしてよく洗う。足で踏んで洗う人もいるけれど、リタは治療師の大切な服や治療用の大切な包帯を足で踏む気にはなれなかった。

そして川の水で灰を洗い流して、ふつうならそれで洗濯は終り、あとは干すだけなのだけれど、リタの場合は、その洗濯物を治療師の家まで持って帰り、薬草の液に浸す。それからよく絞って干す。リタは丁寧に皺を伸ばして、隅々までお日さまの光が当るように干す。よく干すとそれだけ匂いが少なくなることにリタは気付いていた。

洗濯が終ると、リタは再び川に行って手など薬草の液に触れて匂いがついてしまった部分をよく洗う。着ている服からも匂いはするけれど、やはり直接液体に触れた部分は特別くさい。

それから治療師がいれば話を聞いたり、言いつけられた雑用をしたりするのだけれど、今日はリタをおいて一人で病人の様子を見に行っているのですることがない。仕方がないので文字や数字のおさらいをしたりしていると、昼が近くなるので食事の準備をする。

治療師はお酒を飲み過ぎるからと野菜のスープを作り、昨夜のソーセージが残っていたので茹で直して待っていると、治療師はなかなか帰って来ない。

これは昼をご馳走になっているのかも知れないと思っていると、赤い顔をした治療師が帰って来て、昼は食べて来たからいらないという。食べてきたというよりは飲んで来たという方が正しいのだろう。最近は、村の人も治療師が酒好きだとわかって昼でも酒を勧めるのだ。

それからリタはスープだけでもと治療師に勧めて、自分は茹で直したので味が薄くなってしまったソーセージとパンを食べ、スープを飲んだ。

「よし、これから薬草を採りに行くよ。昨日はお前が酔っ払ってしまって、途中で帰って来たからね。今日は昨日の続きだ」

リタが食べ終わるのを待って治療師がそう言ったので、リタは薬草を入れる大きな袋を出して来た。

「昨日採った薬草が入っているけど」

「ああ、それじゃ、薬草庫のテーブルの上に出して置くんだね」

リタはテーブルの上に薬草と苔を分けて並べた。
「よし、それじゃあ、昨日の道は覚えているかい。ためしにお前が先になって歩いてごらん」
リタは昨日治療師が歩いたところを思い出しながら、森の中を歩いて行った。昨日治療師も道を間違えたので、リタも同じように間違えそうになった。
「ちがう、そこはあたしが間違えて入ったところだよ」
「とても覚えられそうもないわ」
「いつも一緒に来るわけにはいかないんだよ。慣れたら一人で薬草を採ってもらわないと。見習いの仕事としてね」
「木に目印を付けたらどうかしら」
「駄目だよ、薬草の生えているところを村人に知られてしまうからね」
「小さな目立たない目印だったらどうかしら」
「駄目だよ。なあに、心配しなくてもそのうち覚えるさ」
それでもなんとなくここだと思うところで藪の中に分け入って進むとカタリスの生えている日だまりに出た。

「よしよし、これはなんていう薬草で効果は何だい」
「えーと、これはカタリスで効果は化膿止め」
「よし、じゃあ次に行こうかね」
それからリタはセンダナの生えている崖下に行き、その名前と効果を言った。
「よし、それじゃあ、次の薬草が生えているところに案内しようかね」
治療師はそう言って先に立って歩き、別の場所に出た。
「このピランサは実はどこにでもあるんだが、ここはたまたまいっぱいまとまって生えているからね。ああ、これは採らなくてもいい。豚の体に斑点が出る病気があってね、それに効く薬になるんだが、実のところあまり効かないんだよ。一応、覚えておいておくれ」
「薬が効かなかったら、豚はどうなるの？」
「たいていは死ぬね」
「そんなのかわいそうだわ」
「そんなこと言っても仕方ないだろうよ。人間の病気だって薬が効かなくて死ぬことはよくあるんだよ」
「そうね、そのとおりね」

「ただね、豚の病気にはわざわざ効かない薬を与えたりはしないけれど、人間の場合にはたいてい何か薬をあげるね」
「どうして？」
「ひとつには、病気を治せなくても熱を下げたり、痛みを止めたりして楽にさせることが出来るからさ。もうひとつは、どうしても治らない病気でも気休めは必要だからさ」
「難しいわ」
「そのうちわかるさ」
治療師はそこを離れてまた森の中を歩き、小さな泉のそばに出た。
「こんなところにも泉が湧いているのね。知らなかったわ」
泉から流れ出る細い澄んだ水の中に、細長い葉をした草が生えていた。
「これがネラントス。この球根が熱冷ましの薬になる。葉にも少し熱冷ましの効果があるが、根の方が薬としてはいい」
治療師はその薬草を三本根ごと引き抜いて薬草袋に入れた。リタは治療師の言葉を暗記しようと頑張った。
更に森の中を歩いてから突然治療師は立ち止

まった。
「これこれ。見過ごすところだったよ。この森にもあったんだね」
そう言って治療師は木の枝から垂れ下がった蔦を軽く引っ張った。
「この蔦は咳止めになるんだよ。いままでこの森にあるとは気がつかなかったよ。この丸い葉っぱが特徴なんだ。ほら、まん丸だろう」
リタによく蔦の葉を見せてから、治療師はその垂れ下がった蔦を引っ張った。蔦はなかなか千切れないで、絡みついている枝がしなうばかりだった。なにかの鳥が驚いて飛び立った。
治療師がさらに強く蔦を引っ張ると、蔦が千切れると同時に、ドサッという音がして何かが落ちて来た。
「おやまあ、鳥の巣が落ちて来たよ」
リタが近寄ってみると、巣から放り出されて弱々しく鳴いている真っ黒な雛鳥がいた。
「ああ、こりゃあカラスの雛だね。一羽だけのようだから、巣立ち遅れた末っ子だろう」
カラスの雛は草の上で弱々しくもがいているが、その動きが少しおかしいことにリタは気付いた。

「なんだか変だわ。怪我しているのかしら」
「おや、落ちた拍子に怪我でもしたかね。こいつは悪いことをしちゃまったね」
「ねえ、治療師、この子の怪我を治して貰えないかしら」
「そんなことを言ったってお前、雛鳥だよ。怪我を見るくらいならいいけれど、餌はどうするのさ。まあ、巣ごと落ちちまったんじゃあ、もう親鳥は面倒を見ないだろうけど……」
「あたしが面倒を見るわ」
「お前には見習いとしてやることがあるだろうが」
「それもやる。両方やるから。お願い」
「まあね、確かに見習いに動物の世話をさせて治療の勉強に役立てるというやり方もあるが、それにはお前はまだ早いんじゃないかねぇ。もっとも、時期が決まっているわけじゃあないが……」
「お願い、お願い。だって放っておけないでしょ」
「ああ、もうわかったよ。あたしが巣を落としちまったのがいけないのさ」
「ありがとう、治療師。じゃあ、早く連れて帰って治してあげないと」
そう言うとリタはカラスの雛を拾い上げて両

手で大切そうに包んだ。
「おい、リタ。まだ薬草採りの途中だろうが」
「だって、早く治してあげないと」
「まったく、いつまで経っても薬草採りがはかどらないじゃないか」
治療師はぶつぶつ言いながらリタが地面に置いた薬草の袋を拾い上げて肩にかついだ。

治療師の家の帰ってから、詳しくカラスの雛を診察したところ、骨は折れていなくて単なる打ち身だろうということになった。治療師はリタへの説明も兼ねて打ち身の塗り薬を雛に塗った。
リタは雛にクロと名前を付けた。だって黒いからというと治療師はなんの工夫もないもんだと笑った。小さな箱に藁くずを入れてクロの巣を作りその中にクロを入れると、クロはさっそく口を大きくあけて餌をねだった。
治療師はクロの餌にはなんでもいいからその口に入るくらいの大きさの虫をやるといいだろうとリタに教えてくれた。リタは庭の土を掘り返してミミズを捕まえて、クロの口に入れた。
しかしクロはたちまちミミズを食べてしまい、すぐにまた口を開けて餌をねだった。仕方がない

のでリタはまたミミズを捕まえて来てクロに与えたが、クロはすぐに次の餌をねだるのだった。
「あんまり餌を与えすぎるんじゃないよ。雛鳥は満腹ってものを知らないんだからね」
そう言われてリタはそれ以上餌をやるのを止めた。治療師がリタを薬草庫に呼んで、採って来た薬草の乾燥手続きを教えた。薬草は乾燥させて保存するのだ。根から泥を落として、天井から吊るして乾燥させる。球根はそのまま戸棚にしまう。苔は水気を切って箱の中に入れておく。
しかし、その説明を聞いている間も、リタはクロのことが気になって仕方がなかった。なんだかクロが餌をねだって鳴く声が聞こえるような気がする。
治療師の説明が終り、採って来た薬草もすべて片づいたので、リタはクロの巣箱を覗いた。やはりクロは餌をねだって鳴いていた。治療師の顔を見ると、仕方ないねというようにうなずいていたので、リタはまた餌を取りに行った。
ミミズばかり与えていると、クロが大人になってからミミズしか食べられなくなるかも知れないと、今度は草むらの中からバッタやコオロギを探して捕まえた。少し大きくて食べにくいか

も知れないと思ったが、クロは平気で丸ごと飲み込んでしまった。

リタは手を洗ってから、夕食の支度を始めた。治療師は薬品庫でまだリタには教えてくれない薬品の調合を行っている。夕食は茹で直しの茹で直しソーセージと野菜と豆のスープだけになってしまったが、ワインを飲んだ治療師は特に文句を言わなかった。

夕食の後、またクロの餌を取りに外に出たリタは、ようやくクロの世話が思ったよりも大変だと気がついた。一晩中餌をやりつづけなければならないのかと思ったが、治療師が暗くすれば眠ると言ったので、リタはようやく家に帰った。

クロの朝は早いだろうと、リタが水汲みの前に治療師の家に寄ってみると、やはりクロは起きていて大きく口を開けて餌をねだっていた。急いで庭の土を掘り返してミミズを捕まえて、クロの口に放り込んでから、すぐに泉に水汲みに行き、空想に浸る余裕もなく、家に帰るとまたすぐ治療師の家に行ってクロに餌をやり、家に戻って朝食を取り、また治療師の家に行ってクロに餌をやる。

リタはようやく一度にたくさん虫を捕まえておいて、箱にでも入れておけばいいのだと気がついた。何度も餌を採りに行くよりもその方が面倒が少ない。

それで、ミミズを採っては箱に入れ、バッタを採っては別の箱に入れ、魚も食べるかも知れないと小川でメダカを採って桶に入れ、ついでにオタマジャクシもいたので一緒に桶に入れておいた。

その箱をみんなクロの巣箱のそばに置いておいたら、なんだこれは邪魔で仕方がないよと治療師に叱られた。それで餌の箱は家の軒下に移した。

餌採りの回数が減って余裕が出来てみると、クロが大きく口を開けて餌をねだるのは、リタや治療師が近づいた時だけだとわかった。クロは、お腹が空いて餌をねだっているのではなく、餌をくれる人が近くにいるとわかると、餌をねだる行動をしているのであった。

そのことに気付くとリタは少し餌の回数を減らした。それでも治療師の見習いとしての仕事と餌採りと餌やりでリタは忙しく、治療師と薬草採りに森に出かけることが出来なかった。

クロにはまったく好みというものがなく、どんなものでもリタが口に入れると飲み込んだ。治療師などはパンくずを丸めて与えていたが、クロはそれも他の餌と同様に飲み込んだ。

やがて巣立ちの時が近づいたのか、クロは時々羽ばたくようなまねをするようになった。そうなるとリタは急に不安になった。

「ねえ、治療師。クロに飛び方を教えてあげなきゃいけないわ。どうしたらいいかしら」

「何を馬鹿なことを言っているんだい、リタ。人間が鳥に飛び方を教えられる訳がないだろうが」

「じゃあ、クロはどうやって飛び方を習ったらいいの。やはり親カラスを連れて来なきゃ駄目かしら」

「お前はどうやってクロの親を探す気なんだい」

「それが問題なのよね」

「ところで、リタ、お前はどうやって歩き方を習ったんだい」

「そんなこと覚えてないわ」

「どこか赤ん坊のいる家に行って調べて来たらどうだい」

「そんなことより、あたしが知りたいのは飛び

方なの」
「簡単に飛び方がわかるもんなら、あたしも習って空を飛んでみたいものだね」
「もう、治療師ったら……。あたしが言いたいのはそういうことじゃないのよ」
「ところで、クロの巣箱だけど、床の上の置いてあると邪魔なんだよ。こないだなんか、踏んづけそうになったよ」
踏みつけられては堪らないとリタはクロの巣箱をテーブルの上に乗せておいた。そうしたら、テーブルの上こそ邪魔で仕方がないと言われた。
それでリタは食器棚の上にクロの巣箱を乗せ、餌をやる時は巣箱を下ろして餌をやることにした。巣箱を上げ下げする時に、揺れるのが不安なのか、クロは羽根をばたばたさせる。
ある日、リタが家での朝食を終えて、治療師の家に来てみると、クロが床の上を歩いていた。巣箱は棚の上にあるので、きっと巣箱から顔を出しているうちに落ちたのだろうとリタは思った。クロには怪我をしている様子はなかった。
それからリタは治療師が出かけている時などは巣箱をテーブルの上に置いておくことにした。テーブルの上からなら落ちても怪我をしないだ

ろうと思ったのだ。それでも時々治療師に見つかって、棚の上に戻されてしまった。
何度かクロは巣箱から落ちたようで、床の上やテーブルの上を歩いているところをリタは見かけた。その度にリタは巣箱の中にクロを戻した。もう体が大きくなったから、落ちても怪我をしないのかもしれないとリタは思った。でも、歩いてばかりでなく、早く飛べるようになって欲しい。
病人が出て、治療師が呼ばれる時に、リタも一緒に行くことが多くなっていた。その日もリタは治療師と一緒に、病人を診に行って昼前に二人で帰ってきた。
治療師の家の前まで来た時、リタはクロが窓のところに止まってこちらを見ているのに気がついた。クロもこちらに気がついたのか、カアと鳴いた。
その時、リタは窓の下に大きな猫が忍び寄ってクロを狙っているのが見えた。リタはあわてて石を拾って投げつけようとしたが、構えた時には既に猫はクロに飛びかかっていた。
あっと思う間もなく、クロは羽ばたいて窓から飛び立ち、猫の爪は宙を引っかいた。

「飛んだ、クロが飛んだ」
リタが喜んで叫ぶと、治療師が悠然と答えた。
「何を驚いているんだね。カラスが飛ぶのは当たり前じゃないか」
クロは一度高く飛んでから、ゆっくりと降りて来てリタの肩に止った。